

水稻病虫害防除対策（8月）

1 いもち病（穂いもち）

- (1) 7月下旬の調査では、県内での葉いもちの発生ほ場割合は、平年よりやや低くなりました。
- (2) 上位葉に葉いもちの病斑が認められるほ場では、早急に散布剤による防除を行ってください。
- (3) 散布剤による穂いもち防除を実施する場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回散布を基本に実施してください（表1、3）。その後、多発するおそれがある場合は、さらに傾穂期に追加散布を行ってください。
- (4) 水面施用剤による穂いもち防除を実施する場合は、各薬剤の施用適期を逃さずに施用してください（表2）。
- (5) 薬剤防除の実施に当たっては、以下のことに注意してください。
 - ア 耐性菌の出現を防ぐため、同じ系統の薬剤の連用はさけてください。特に QoI 剤（FRAC:コード 11）は、県内でも耐性菌の発生が確認されています。QoI 剤の使用は、育苗箱施用薬剤を含めて年1回までとしてください。
 - イ 水面施用剤は、湛水状態にして所定量を均一に施用してください。施用後は7日以上止水状態を保ち、落水や掛け流しは行わないでください。
 - ウ アミスターエイトは、リンゴの一部品種に葉害を発生させることがあるため、リンゴにかからないよう注意してください。
 - エ パック剤やジャンボ剤は、藻や浮草で拡散が阻害される場合は使用をさけてください。

表1 いもち病（穂いもち）の防除薬剤（茎葉散布剤）

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
アミスターエイト	アゾキシストロビン	11	収穫14日前まで	1,000～1,500倍	3回以内	散布
カスミン液剤	カスガマイシン	24	穂揃期まで	1,000倍	2回以内	散布
ノンプラス粉剤DL	トリシクラゾール	16.1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内	散布
	フェリムゾン	U14				
ノンプラスフロアブル	トリシクラゾール	16.1	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内	散布
	フェリムゾン	U14				
フジワシ乳剤	イソプロチオラン	6	収穫14日前まで	1,000倍	2回以内	散布
ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内	散布
	フサライド	16.1				
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内	散布
	フサライド	16.1				

注1) 液剤、乳剤、フロアブル剤は10a当たり140～150L散布する。

注2) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表2 穂いもちの防除薬剤（水面施用剤）

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
コラトップ粒剤5	ピロキロン	16.1	<u>出穂15～10日前</u>	3～4kg	2回以内	散布
コラトップ 1キロ粒剤12	ピロキロン	16.1	<u>出穂15～10日前</u>	1～1.5kg	2回以内	散布
コラトップ ジャンボP	ピロキロン	16.1	<u>出穂15～10日前</u>	小包装（パック） 10～13個 (500～650g)	2回以内	水田に小包装（パック）のまま 投げ入れる。
フジワシ粒剤	イソプロチオラン	6	出穂10～30日前 (収穫30日前まで)	3～5kg	2回以内	湛水散布

注1) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注2) 試験研究の成果等に基づき、効果的な使用方法として使用条件を限定した部分には下線を付した。

表3 いもち病（穂いもち）の防除薬剤（無人航空機散布）

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、 10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
アミスターエイト*	アゾキシストロビン	11	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	3 回以内	無人航空機 による散布
フジワ ン 乳 剤	イソプロチオラン	6	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	2 回以内	無人航空機 による散布
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫 7 日前まで	8 倍 0.8L	2 回以内	無人航空機 による散布
	フサライド	16.1				
ノンブラスバリダ フロアブル*	トリシクラゾール	16.1	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	2 回以内	無人ヘリコプター による散布
	バリダマイシン	U18				
	フェリムゾン	U14				
オリゼメート粒剤 20	プロベナゾール	P02	収穫 14 日前まで	1 kg	2 回以内	無人航空機 による散布
コラトップ粒剤 24	ピロキロン	16.1	出穂 30～5 日前	0.5 kg	2 回以内	無人航空機 による散布
コラトップ 1 キロ粒剤 12	ピロキロン	16.1	出穂 30～5 日前	1 kg	2 回以内	無人航空機 による散布

注1) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注2) *は紋枯病との同時防除に使用できる薬剤を表す。

2 紋枯病

- (1) 今後も高温が続く見込みのため、病斑が認められるほ場や常発ほ場では、上位葉鞘に伸展して被害が大きくなるおそれがあります。多発の兆候がみられた場合は、穂揃期に散布剤を使用してください。
- (2) 水面施用剤による防除を実施する場合は、各薬剤の施用適期を逃さずに施用してください（表4）。
- (3) 散布剤による防除は、上位葉鞘へ伸展する前の穂ばらみ期に実施してください。その後、多発するおそれがある場合は、穂揃期に追加散布を行ってください（表4）。
- (4) アミスターエイトは、リンゴの一部品種に薬害を発生させることがあるため、リンゴにかからないよう注意してください。

表4 紋枯病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり 使用量	本剤の 使用回数	使用方法
水面 施用剤	モンガリット粒剤	シメコナゾール	3	出穂 28～14 日前	3～4 kg	2 回以内	湛水散布
	リンバー粒剤	フラメトピル	7	出穂 30～10 日前	3～4 kg	2 回以内	散布
散布剤	アミスターエイト	アゾキシストロビン	11	収穫 14 日前まで	1,000～1,500 倍	3 回以内	散布
	バリダシン液剤 5	バリダマイシン	U18	収穫 14 日前まで	1,000 倍	5 回以内	散布
	モンカットファイン 粉剤 20 DL	フルトラニル	7	収穫 14 日前まで	3～4 kg	4 回以内	散布

注1) 液剤、フロアブル剤は 10a 当たり 140～150L 散布する。

注2) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注3) 試験研究の成果等に基づき、効果的な使用方法として使用条件を限定した部分には下線を付した。

3 ごま葉枯病

- (1) 本病は、砂質土壌水田等では、肥料分の流亡により、生育後半に肥料切れとなって発生しやすくなります。深耕、堆きゅう肥、客土、ケイカル等の施用等によって地力の増進を図ってください。
- (2) 最高分けつ期頃から病斑が確認され始め、穂ばらみ期頃から急激に進展します。出穂後は、穂首や枝梗にも病斑を形成しますが、穂いもちのように白穂になることはありません。多発すると上位葉が枯れあがり、穂枯れ症状となって収量の悪化や、茶米などを生じて減収の要因になります。
- (3) 穂枯れの発生が懸念される場合は、穂揃期と傾穂期に散布剤で防除を行ってください（表5）。

表5 ごま葉枯病の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
アミスターエイト	アズキシストロビン	11	収穫14日前まで	1,000～1,500倍	3回以内	散布
ノンブラス粉剤DL	トリシクラゾール	16.1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内	散布
	フェリムゾン	U14				
ノンブラスフロアブル	トリシクラゾール	16.1	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内	散布
	フェリムゾン	U14				
ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内	散布
	フサライド	16.1				
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内	散布
	フサライド	16.1				

注) フロアブル剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

4 変色米

- (1) 腹黒米（アルタナリア菌）は、玄米の腹側に黒褐色の病斑がみられ、夏期高温の年に発生が多くなります。
- (2) 紅変米（エピコッカム菌）は、玄米の表面に紅色の斑点を生じます。出穂後低温の年に発生が多くなります。
- (3) 褐色米（カーブラリア菌）は、玄米の表面が褐色になり、黒褐色の微斑点を生じる場合があります。高温、乾燥、強風などによって抵抗力の低下したイネにみられます。
- (4) 散布剤を使用する場合は、穂ばらみ期～穂揃期に散布してください（表6）。
- (5) 収穫後は、玄米の品質低下を防ぐため、速やかな乾燥・調製を心がけてください。

表6 変色米の防除薬剤

薬剤名	有効成分名	FRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用 方法	対象		
							アルタ ナリア	エピコ ッカム	カーブ ラリア
ノンブラス 粉剤DL	トリシクラ ゾール	16.1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内	散布			○
	フェリム ゾン	U14							
ノンブラス フロアブル	トリシクラ ゾール	16.1	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内	散布	○	○	○
	フェリム ゾン	U14							
ブラシン 粉剤DL	フェリム ゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内	散布		○	○
	フサライド	16.1							
ブラシン フロアブル	フェリム ゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内	散布	○	○	○
	フサライド	16.1							

注) フロアブル剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

5 斑点米カメムシ類

- (1) 7月下旬の畦畔および本田での発生地点割合は、平年より高くなりました。また、今後も高温となる見込みで、水田周辺の密度の増加や活動の活発化により、被害が増えるおそれがあります。
- (2) 県内では、全域でアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ、ホソハリカメムシ、浜通り全域及び中通りの一部でクモヘリカメムシが主に発生しています。
- (3) 斑点米カメムシ類は、イネが出穂すると水田に侵入するため、出穂時期が周囲と比べて早い水田に被害が集中しやすくなります。早生品種や移植時期が周囲と比べて早かったほ場では、斑点米カメムシ類の侵入に注意し、出穂期以降に水田で発生がみられる場合は、薬剤防除を行ってください。
- (4) 散布剤による防除は、加害種がカスミカメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ）の場合は、乳熟期（出穂期の7～10日後）に1回、その7日後頃に1回の2回散布を基本とします。クモヘリカメムシの場合は、出穂期から穂揃期に1回、その10日後頃に1回の2回散布を基本とします（表7、9）。
- (5) 水面施用剤を使用する場合は、穂揃期～乳熟期に湛水状態で散布し、7日以上止水してください（表8）。その後、多発が予想される場合は、散布剤により追加防除を行いましょう。
- (6) 水面施用剤は、クモヘリカメムシ等の大型のカメムシに対しては防除効果が劣ることがあるので、液剤や粉剤を使用しましょう。

表7 カメムシ類の防除薬剤（茎葉散布剤）

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の使用 回数	使用 方法
アルバリン粉剤DL	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	3kg	3回以内	散布
キラップフロアブル	エチプロール	2B	収穫14日前まで	1,000～2,000倍	2回以内	散布
キラップ粉剤DL	エチプロール	2B	収穫14日前まで	3～4kg	2回以内	散布
スタークル液剤10	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	1,000倍	3回以内	散布
スタークル粉剤DL	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	3kg	3回以内	散布
スミチオン乳剤	M E P	1B	収穫21日前まで	1,000倍	2回以内	散布
スミチオン粉剤3DL	M E P	1B	収穫21日前まで	3～4kg	2回以内 (出穂前 は1回)	散布
ダントツフロアブル	クロチアニジン	4A	収穫7日前まで	5,000倍	3回以内	散布
ダントツ粉剤DL	クロチアニジン	4A	収穫7日前まで	3～4kg	3回以内	散布

注1) 液剤、乳剤、フロアブル剤は10a当たり140～150L散布する。

注2) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表8 カメムシ類の防除薬剤（水面施用剤）

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	10a当たり使用量	本剤の 使用回数	使用 方法
アルバリン粒剤	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	3kg	3回以内	散布
キラップ粒剤	エチプロール	2B	収穫14日前まで	3kg	2回以内	湛水 散布
スタークル粒剤	ジノテフラン	4A	収穫7日前まで	3kg	3回以内	散布
ダントツ粒剤	クロチアニジン	4A	収穫7日前まで	3～4kg	3回以内	散布

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表9 カメムシ類の防除薬剤（無人航空機散布）

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用 方法
キラップフロアブル	エチプロール	2 B	収穫 14 日前まで	8～16 倍 0.8L	2 回以内	無人ヘリコプター による散布
スタークル液剤 10	ジノテフラン	4 A	収穫 7 日前まで	8 倍 0.8L	3 回以内	無人航空機 による散布
ダントツフロアブル	クロチアニジン	4 A	収穫 7 日前まで	24 倍 0.8L	3 回以内	無人航空機 による散布
トレボンエアー	エトフェンプロックス	3 A	収穫 14 日前まで	8 倍 0.8L	3 回以内	無人航空機 による散布

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

6 イネツトムシ（イチモンジセセリ）

- (1) 本種は、第1世代成虫が7月中旬頃に発蛾最盛期となり、イネに産卵します。第2世代幼虫は、8月中旬から9月にかけてイネの葉を綴って「ツト」を作り、その中で蛹になります。
- (2) 発生が多いと止葉にツトを作る幼虫が多くなり、穂の充実が悪くなるほか、品質が低下します。
- (3) 遅く移植したほ場や直播栽培など8月中旬以降に出穂するほ場では、被害が大きくなりやすく、また、葉色の濃いほ場では、発生が多くなりやすいため注意してください。
- (4) 中齢幼虫以降になるとツトが大きくなり、薬剤の防除効果が低下するため、防除は幼虫がまだ小さい8月上旬～中旬に行ってください（表10）。

表10 イネツトムシの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用 方法
スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫 21 日前まで	1,000 倍	2 回以内	散布

注) 乳剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

7 ニカメイチュウ

- (1) 本種の第2世代成虫は、例年7月6半旬～8月1半旬頃に発蛾最盛期となります。
- (2) 第2世代幼虫の被害は白穂となるため、被害が大きいと収量に影響します。
- (3) 水面施用剤を使用する場合は、発蛾最盛期に湛水状態で施用し、7日以上止水してください。散布剤を使用する場合は、発蛾最盛期の7日後までに株元によく付着するように散布してください（表11）。

表11 ニカメイチュウの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用 方法
スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫 21 日前まで	800～1,000 倍	2 回以内	散布
スミチオン粉剤 3DL	M E P	1 B	収穫 21 日前まで	3～4 kg	2 回以内（但し、 出穂前は1回）	散布
パダン粒剤 4	カルタップ	14	収穫 30 日前まで	3～4 kg	6 回以内	散布

注) 乳剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

8 セジロウンカ

- (1) 本種は、7月頃に成虫が本田に飛来し、飛来成虫からふ化した幼虫が7月下旬～8月上旬に発生盛期となります。
- (2) 出穂期に幼虫の発生が多いと、穂を吸汁するため褐変するほか、排泄物によって発生した「スス」で穂が汚れ、千粒重の減少や品質の低下をもたらします。
- (3) 薬剤防除の目安は、1株当たりの幼虫数が5～15頭です(表12)。

表12 セジロウンカの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
マラソン乳剤	マラソン	1B	収穫7日前まで	2,000倍	5回以内	散布

注) 乳剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

9 ツマグロヨコバイ

- (1) 本種は、年4回発生し、出穂期から乳熟期に発生した幼虫による吸汁被害が収量に影響します。
- (2) 発生が多いと上位葉や穂を吸汁し、葉先が赤黄色に変わります。また、排泄物にすす病菌が発生し、植物体が「スス」で黒くなります。
- (3) 薬剤防除の目安は、1株当たりの成虫と老齢幼虫の合計が10頭以上です(表13)。

表13 ツマグロヨコバイの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	IRAC コード	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数	使用方法
マラソン乳剤	マラソン	1B	収穫7日前まで	2,000倍	5回以内	散布

注) 乳剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農林水産省のホームページ (<https://pesticide.maff.go.jp/>) 等で最新の登録内容を確認してください。(記載中の登録内容は令和7年8月1日現在)

- ◆ 福島県では6月10日から9月10日まで令和7年度農薬危害防止運動を実施しています。
- ◆ 農薬を使用する際は、ラベルをよく読んで正しく使用しましょう。
- ◆ 無人航空機で農薬を散布する場合、散布前に養蜂飼育情報の確認、散布計画の周知を行いましょう。

●情報内容への質問は、福島県農業総合センター安全農業推進部発生予察課(病害虫防除所)まで御連絡ください。

TEL 024-958-1709 FAX 024-958-1727